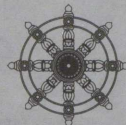


# 全仏

ZENBUTSU



# 451

仏暦2542年 9月 (1999年)  
財団法人 全日本仏教会  
JAPAN BUDDHIST FEDERATION



教化セミナー「葬儀のこれからを考える(2)」(関連記事4~7頁)

WFB 執行委員会開催  
都道府県仏教会代表者会議

## 都道府県仏教会代表者会議

六月三十日、午前十一時半より、増上寺大  
殿南側信徒控室で、都道府県仏教会代表者会  
議が開催された。

蓮事務総長の挨拶に続き、議長に井桁雄弘  
大阪府仏教会事務局長を選出、議事がすすめ  
られた。

**協議事項①平成十二年度都道府県仏教会負  
担金について**



増上寺大殿南側信徒控室で開催された都道府県  
仏教会代表者会議（6月30日）

都道府県仏教会代表者より負担金検討委員  
を選出し、検討を行うことになった。

**協議事項②第三十八回全日本仏教徒会議開  
催について**

出席者の中から開催を検討したい旨の提案  
があり、事務局と連絡をとりながら開催に向  
け協議を進めることとなった。

**協議事項③ルンビニー園マヤ堂復興事業の  
推進について**

櫻井国際文化部長より現況の説明、質疑応  
答が行われた。

**協議事項④墓理法改定に伴う備付書類への  
対応について**

長谷川正浩本会顧問弁護士が概況を説明、  
質疑応答の後、今後事務局より関係省庁へ問  
い合わせを行い対応を協議し、その経過を報  
告することとなった。

## 税 務 委 員 会

六月二十五日午後二時より、明照会館で税  
務委員会が開催された。

初めに、宗教学者の最近の税務について、  
社本公一公認会計士より説明いただき、活発  
に質疑応答が行われた。続いて長谷川正浩本  
会顧問弁護士から墓理法改定による備付書類  
に関して説明があり、対応が協議された。

## 全日本仏教会 無料法律相談室

全日本仏教会では、長谷川正浩弁護士  
による、本会関係者を対象とした無料法  
律相談室を開設しています。

相談内容は、寺院運営をめぐる諸問題、  
税務、一般民事等、ご自由ですが、現在、  
宗教学法人法の改定に伴い、相談件数が増  
えています。相談をご希望される方は、  
必ず電話で予約をお願いいたします。

**日時** 原則として毎月第二・第四木曜日  
午後一時～

**場所** 明照会館  
(東京都港区芝公園四丁目)

**予約** 全日本仏教会事務局

〇三―三三四三七―九二七五



税務委員会（6月25日 於、明照会館）

# WFB執行委員会

六月十七、十八日の両日、タイ、バンコクのWFB（世界仏教徒連盟）本部で、第五十九回WFB執行委員会が開催された。本会からは、櫻井国際文化部長、入西国際文化部次長が出席した。

委員会では、来年のWFB創立五十周年、バンコクに来年以降に設立準備が進められて



WFB執行委員会（6月17・18日 於、バンコク）

# 同和委員会

七月二十六日午後一時半から、西山浄土宗

いる世界仏教徒大学、また第二十一回世界仏教徒会議が、スリランカでの開催で引き続き検討が行われていることなどが報告された。また、ネパール代表から、ルンビニー園復興事業への更なる協力が参加各国へ要請された。

## 全日本仏教会ホームページ

<http://www.jtvan.co.jp/~jbf>

### 内容

- ・全日本仏教会からのおしらせ
- ・加盟団体一覧(加盟団体ホームページへのリンク有)
- ・改定宗教法人法に伴う宗教法人の備え付け・提出書類書式のダウンロード
- ・『全仏誌』より
- ・関連団体URL集 など



※全日本仏教会のメールアドレスが下記に変更になりました。

[jbf@opal.famille.ne.jp](mailto:jbf@opal.famille.ne.jp)

宗務所で第三回同和委員会が開催された。そして、本年度の同和研修会は十月二十八日午前十時から妙心寺花園会館を会場に、「ケガレ」の問題をテーマに開催されることが決定された。

## 平成十一年度教化セミナー

# 葬儀のこれからを考える(2) (上)

六月三十日午後一時半から、東京芝の増上寺地下三縁ホールを会場に、加盟団体の僧侶約百五十名の参加の下、本年度教化セミナーを開催した。

昨年十一月に東京築地本願寺第二伝道会館を会場に、平成十年度教化セミナー「葬儀のこれからを考える」を開催し、近年の葬儀に関する問題点を中心に様々な観点から討議した。今回は、それを基に仏教者がどの様に対処し解決すべきか、その方向性を見いだす事を主眼に、次の三名のパネリストの方々に討論して戴いた。

本会副会長・駒澤大学前学長 奈良康明師  
(曹洞宗法清寺住職)、大村英昭師(浄土真宗本願寺派圓龍寺前住職)、東京大学大学院人文社会系研究科助手 村上興匡師(天台宗僧侶)。紙面の都合上、要約し掲載する。

(文責 社会部)

### 発題の部

奈良康明師 葬儀の最も大きな働きとして

グリーフワーク(悲しみの癒し)を挙げたい。

慶応大学の心理学の小此木啓吾教授と対談した時に先生から伺った話だが、先生の友人でアメリカの医師と先生と一緒に、突然に夫に死なれた女性数十人を日本とアメリカで調査した。そこでの顕著な現象は、アメリカの女性はヒステリックになる率が高いが、日本の女性はその症状を殆ど示さなかった事である。

その原因に、仏壇と位牌が重要な役割をしていることが解った。日本では亡くなると仏壇に位牌を納め、お茶やご飯を差し上げ恰も生きていくかの如く語りかける。語りかけているうちに、亡き人は徐々にご先祖様になり、仏様になって行く。この過程で感情が発散され、吸収される。これが仏壇と位牌のグリーフワークとしての大きな効用であり、先生からもっとその効用を説くべきだと言われた。

世界中に、葬祭のない文化はない。葬祭のニーズと必然性があり、グリーフワークの機能があるからで、仏教が鎌倉室町時代から発

展したのは、檀信徒の葬祭を手掛けたからである。私はインド宗教文化史を専攻し仏教を文化として研究しているが、お釈迦様以降「悟り」が仏教の本義であり、それ以外の一切の民俗信仰的な儀礼を拒否する姿勢が仏教の伝承としてある。ストゥーパ(仏塔)崇拜は在家信者がやるべきとか、功德を積んで良き後生を願うことも冷たく突き放して来た。葬祭も同様である。インドではお釈迦様以降の代々の祖師方が信者達に、葬式等の民俗信仰的な儀礼を殆どやらない、だからインドから仏教が消えたとは信じている。反面、日本、中国、韓国等の東南アジアの仏教教団は葬祭・通過儀礼を行うようになったからこそ教団として存続して来たと思う。

「悟り」「救い」は仏教の本義であり、それなくしては仏教ではない。それを忘れずにいるならば、一般の人々の心の悩みを取り除いて行く葬祭等の民俗信仰的な儀礼を司ることに問題はなく、当然の事である。日本ではカトリック教団も従来の葬祭への姿勢を大転回して、祖先崇拜を取り上げようとしている。

我々が葬祭を行うことに後ろめたさを感じている理由は、「悟り」「救い」以外のものは本義では無く、やっではいけないのだと言う感覚と、葬祭に絡む靈魂の説明が難しく、巧く位置づけられていないことや、各宗派の教



奈良康明師

学の中で葬祭等の儀礼が明確に位置づけられていない事に因ると思う。今後の課題は、これらと教義との係わりを明示することである。曹洞宗では十一世紀の中国に禅苑清規という僧院の規則があり、その中の亡僧（修行半ばで亡くなった修行僧）に対する葬儀の仕方を基本とし、同じ形式で現在まで葬儀を行っている。その為、死者は仏弟子であらねばならないから授戒が必要であり、また同じ仏弟子の仲間を送る葬儀でもある。故人が仏道を行ってゆけるのだろうか。基本的には成仏は生きている人間が行うものだが、道元禅師は、死んでもからはずと修行を続けて行くべき「遙かなる道」を説いており、共に仏道を学んで行くことは意義がある。仏教や禅で葬儀をするには授戒は必要であり、戒名は不要、

自分でつけられるという人は仏式葬儀の必要はない。生前授戒が原則だが、死後に授戒する没後作僧も十分説明出来る。本来、死者の為にあわてて葬儀をするのではなく、生前から死後に連なる信仰の生活を普段から行うことであり、それは仏教の本義である、仏に触れながら生きる「悟り」の生活に近づくことでもある。

次に僧侶の生き方が問題になる。僧侶の宗教者としての自覚が大切だが、それを強調し過ぎると理想論になる。檀信徒との人間的信頼関係があれば、葬儀や戒名等の問題は起こらないはずである。その自覚とは、説法の上手下手でも、学問の有無でも、妻帯の有無でもない。大乘戒を持戒し、及ばずながらも真摯に仏教者として毎日を生きて行く努力があれば、檀信徒から信頼・帰依される。

**大村英昭師** 五木寛之氏の「他力」、石原慎太郎氏の「法華経を生きる」、永六輔氏の「大往生」等の仏教関係の書籍がベストセラーとなったが、それは混乱した社会に対する仏教への期待の現れでもある。サステナビリティ（持続可能性）とは経済学者がこの頃よく使うキーワードだが、それは今迄の開発・発展で進んで来た世界へのアンチテーゼである。これ以上の人口増加は地球の維持に支障がでる。発展を支えて来た石油も百年後に

は枯渇する。これら限りある資源をどう生かすべきか、開発・発展の発想を交換する時代になったが、人間の命だけを特別視しているユダヤ・キリスト教の考え方では解決出来ない。日本仏教では、動物と植物の命も区別しない、皆平等の考えであり、悉皆成仏として、皆同じ命、皆成仏する命として尊ぶ仏教への期待は、地球環境全体を考える時大きい。

不況・リストラの中、人々は真剣に人生を見つめ、引き際の美学とか往生の仕方を考えるようになったが、それは仏教が本来考えて来た道である。ところが文化人達は、今の僧侶はあてにならないから、自分で経典を読みなさい等と言う。人々は世を出るノウハウを僧侶に尋ねたいと考えているのに、その入口の葬儀や戒名等で引っ掛かっている。

仏教に期待が集まっている現在こそ、カトリックの諸宗派統合を我々も推進すべきではないか。葬儀等は、教義の中心では無く民俗信仰に近い通仏教でもあり、一般的な世を出るノウハウ、今後どう生きて行くべきか位のレベルで良い。

日本仏教の本流は「官の仏教」と「野の仏教」に分類出来る。「野の仏教」は在家仏教であり、その特徴はお釈迦さまのストゥーパ・遺骨を中心にしてかけがえの無い人、尊敬した人を失ったやる瀬ない思いを、その遺骨



大村英昭師

に込めて大切に守ってきた。

浄土真宗も、開祖親鸞聖人の遺骨を中心にした大谷本廟を、やる瀬ない思いを持った人達が造った。亡き親鸞聖人の教えを乞いたい時には、そこにお参りした。遺骨を通して、亡き人とのコミュニケーションをとり、その魂のより所として本願寺が出来た。その「野の仏教」の特徴は、伝教大師の説かれた大乘戒の心である。それが人々を戒律主義から解放した。持戒するとは戒律を守る事ではなく、お経の心を保つことであり、心情・思想の問題であって行動の掟ではない。

一方「官の仏教」は鑑真和上以来、戒律主義の仏教であった。伝教大師の大乘戒の主張は真俗一貫であり、この大乘戒を保つことに出家者・在家者の区別はない。ところが、再

び比叡山の戒壇が認められ「官の仏教」化し、大乘戒の心を失ったため、法然上人・親鸞聖人が、再び野に下る運動を始めた。元来、伝教大師の大乘戒の心は中国仏教の戒律主義からの独立、日本仏教の解放宣言だった。更に在家とは肉食妻帯することで、最も素朴な不殺生戒すらも守って生きられない。だから皆懺悔の心を持った。私の宗旨の、三味線の弾き語り続けて来た妙好人は、「俺ら殺し続けて生きているではないけ、白い生きた大根ね、あれを切る度に赤い血が出て来たら俺ら食べられるかな。俺を生かしてくるために死んでくれると思ったら俺だけの命とは思えない。皆のお陰で生かされている自分に気がつく。有り難い一生だと思ひ手を合わせずにいられない。」と「悟り」の境地に近づく。だからこそ、死なねば成仏出来ないという考えにもなった。

即ち、仏（ぶつ）といったら覚者であり、悟った人の事なのに、いつからか日本人は仏（ほとけ）と読むようになった。ほとけと言う時には必ず死が含まれ、死ぬことと悟ることが一致し、死なねば仏に成れないと言う事にもなった。健康で生涯を過ごし、最後は仏になつて欲しい。これが通過儀礼の心だが、これに輪廻転生の考えが入り、生まれ変わる形での元服式、結婚式等の通過儀礼は、一方

で死を含む。白無垢は死装束であり、過去のものが死ぬから生まれ代われる。その完成体として仏に成る。

だから、その都度名前も変わる。最後のほとけになる晴れの門出を祝う名前、それが法名・戒名である。南伝仏教にも立派な清僧はいるが、一般庶民の力になり得たのか。自分達だけが、脱俗の妙境に遊んで居るのではないのか。日本では仏教者は、その道を選ばず人々と悲しみを共にした。野に下り、巷に降りた。そこでは葬儀が意味付けられ、仏教抜き葬儀にならなかつた。僧侶は誇りを持って葬儀を執行すべきだ。

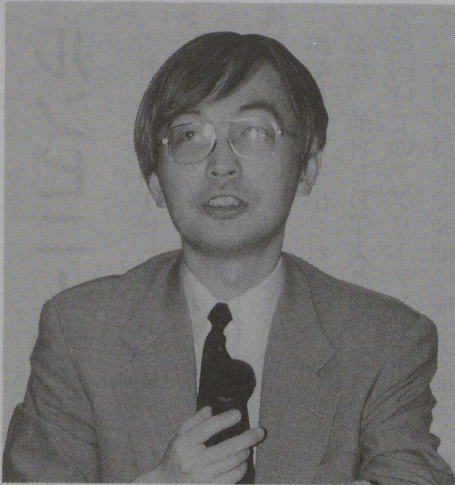
#### 村上興匠師

両先生からは大所高所からのお話を頂いたので、現場に近い話をしたい。

#### 一、葬儀・死への関心の高まりと仏式葬儀批判論

##### ①死亡者数の増大

高齢化社会が進み、十年後に死者は一、五倍の百四十万人に達する。死者数の増加もあって死に接する機会が増え、死はタブーではない。伊丹十三製作の映画「お葬式」がヒットしたが、これは東京を故郷とする二世の人達の現状を現したものだ。身内に死者が出ない限り日頃寺と付き合うことも無く、支援してくれる近所の人も無く、全てが自分たちで行う事を余儀なくされ、終われば葬儀の意味を深く考える余裕もなく何故高額な費用がと



村上興匡師

思い、葬儀批判となる。寺檀関係が都市では崩れて、総代の力も弱くなり寺の運営に関与せず、住職一家による運営になったことが批判の矛先が寺に向かった理由でもある。

### ②葬儀費用への批判

三年前の東京都生活文化局調査では、葬儀費用全体三百八十一万円、寺院費用六十四万円（内戒名料四十万円）となり高額になっている。批判は葬儀が華美になると発生し、それが改まると沈静することを繰り返して来た、戦前は、家産が傾く様になり、家や家の跡取りの視点での批判であったが、最近では自分は熱心な仏教徒ではない、来世も信じない等、自分の主義主張で葬儀をしないという、葬られる側の論理での批判である。

### ③葬儀の個人化

批判は葬儀の個人化とも関連している。地方でも生活様式が都市化し、都市も地方も葬儀は告別式中心になり、組で行ったのが葬儀社へ移った。家から家族そして個人へと主体が変わり、尊厳死や死後の自己決定権等が言われるようになり、自分葬を確実にを行うための遺言銀行もできている。

### 二、仏式葬儀・寺檀関係の社会的位置づけ

#### ①葬儀の社会的機能と僧侶の役割

葬儀を行うことは社会的に意義のあることである。仏式葬儀は九四%を占めており、安心して死んで行ける様にする「死の教育」と、遺族が死の悲しみから立ち直るための「グリーフワーク（悲しみの癒し）」の機能を今迄も担って来たし、これからも期待されている。

#### ②都市の過密、地方の過疎

都市の過密の裏返しとして地方の過疎があり、むしろ地方に大きな問題が生じている。都市では過密のため遺族に対する対応は十分できず寺院との付き合いは衰退する。また住職一家による寺院経営は、葬祭儀礼に接している寺と葬儀社の区別がつき難くなり、僧侶イメージの悪化に繋がっている。

若人が流出して過疎化した地方は高齢化で、「死の教育」を必要としているのに僧侶が不足し、更に地方の都市部と郡部間でも過密と過疎が進み、寺の格差が激しくなっている。

#### ③高齢化社会の進展と薄葬化

今後十年で死者数が一、五倍になるが、それを支える次の世代の人口はその半分となり、負担も重く、年金も減少するので葬儀数は増加しても一件当たりの葬儀費用は減少し、薄葬化せざるを得ない。更に、過疎寺院の統合を防いでいる地域意識も個人化により薄れ、檀信徒の負担の重さから、大規模寺院に檀信徒が集中して小規模寺院の統廃合が進み批判が地方にも波及する。寺院批判の主な原因は、一つの寺院に檀信徒が集中することにもある。ホームドクターと同様のホームテンプルが良い様に思う。その人となり解る寺院であれば心の通った葬儀も儀礼も出来る。

### 三、まとめにかえて

#### ①「同葬共同体」創出の試み

新潟の日蓮宗の寺院では集合墓を作り、ここに入る予定の人達の勉強会としてフェスティバルを定期的に開催し、懇親と死んで行くための意味付け、「死の教育」を試みている。

#### ②宗派としての対策の必要性

前項はどの寺院でも出来ることではなく、宗派としての対策が必要である。檀家数の不均衡も批判の原因でもある。今後は宗派が、儀礼を教義として位置づけ対策をとる必要がある。全仏のこのセミナーを各宗派が対策を講じる切っ掛けにして欲しい。

# ルンビニー委員会

六月二十六日午後一時より、明照会館でルンビニー委員会が開催された。

蓮清典事務総長の挨拶に続き、森和久副委員長退任に伴い、川島宏之師が委員互選により副委員長に選出された。

また、前日LDTより提示されたマヤ堂復元に向けてのアグリーメント再修正案について、次回委員会で詳細に検討が加えられ、対応が協議されることとなった。



ルンビニー委員会（6月26日 於 明照会館）

# 世界平和祈りの集い

八月四日、比叡山延暦寺を会場に、比叡山

宗教サミット十二周年『世界平和祈りの集い』が行われた。本会から野生司総務部長、三浦同和推進部次長が出席した。

午後三時、藤光賢天台宗事務総長の挨拶に続き法楽、渡邊恵進天台座主の平和祈願文奉読、平和の祈りの黙祷、比叡山メッセージの朗読、来賓の挨拶などが行われ、各宗教界からの参加者により世界平和が祈念された。



世界平和祈りの集い（8月4日 於 比叡山）

## 事務局録事

八月

四日 世界平和祈りの集い出席

二十五日 局内会議

二十六日 法律相談室

# 仏旗・バッチ

## 頒布御案内

大仏旗 たて一四〇cm×よこ二一〇cm

三三、〇〇〇円

中仏旗 たて九〇cm×よこ一三五cm

一八、〇〇〇円

小仏旗 たて七〇cm×よこ一〇〇cm

九、三〇〇円

手旗 たて三五cm×よこ五〇cm

八、〇〇〇円

法輪旗 たて九〇cm×よこ一三五cm

七、四〇〇円

仏旗バッチ 二cm×四・五cm

五〇〇円

法輪バッチ 直径一cm

一、〇〇〇円

お申し込み

全日本仏教会財務部

電話 〇三―三四三七―九二七五

FAX 〇三―三四三七―三三六〇